

藩主板倉勝明と新島七五三太

かつあきら



板倉勝明が出版した『甘雨亭叢書』

半田喜作

一、勝明の父勝尚かつひさについて

勝明の父は勝尚と言い、勝明の前の安中の藩主である。綽山、白雲山人などと号し、綽山吟章、水雲問答集などの著書がある。藩学を振興するために造士館をつくり、藩士の子弟の教育に力を注いだ。儒教の考え方が主になった教育の精神で「造士館告示」として、造士館に掲げ守るようにした。次の藩主勝明が勝尚の教育理念を受けつぎ大成した。新島七五三太は直接に勝明の影響を受けついでいる。

安中は教育の町であり、文化の町であると言く人が言

う。そのもとは勝尚にあり、さらに勝明にあつたのではなからうか。

二、板倉勝明について

1、甘雨^{かんう}公と言つた

勝明は文化六年江戸で生れ、安政四年に亡くなつた。四十八歳であつた。甘雨という号を好んで用いた。甘雨と言うのは恵みの雨で、農作物のよくみのる意味がある。勝明が農民を愛撫し、少しでも安楽になつてほしいと言ふ願いが、こもっている。幼小の頃から才智にすぐれていた。さらによく読書をした。漢学は勿論であるが、歴史、古今の治乱成敗などには、詳しくあつた。夜半にもおよんで読書した。酒が好きで読書に倦むと酒を飲み、飲みつつさらに読書をした。

また文章も巧みであつた。西征紀行。東還紀行。中禅寺に遊ぶの記。安中志。白雲山記。節山詠草などの著書、文章がある。

2、学者を招いた

勝明は自分自身も学ぶとともに、藩士も大いに学ぶように奨めた。学ぶことにより人々が進歩し、少しでも幸

福な生活が築けると考えてのことである。学び方によつて昇進さえさせた。藩校を充実させるとともに、一般の人々の教育のための郷学校もつくつた。立派な学者を招いた。

(1) 山田三川

昌平校の舎長をしている。水戸斉昭と懇意で斉昭の推挙で勝明と知ることになつた。明君を得た喜びで安中へ赴任した。安中藩校（造士館）で漢学だけでなく、詩文、経済学も講義した。空いている土地に漆を植え産業を盛んにするように説いた。漆園の記の碑が残っている。墮胎^{たいたい}が人道上よくないことを訴えその取締りもした。海軍の重要性や通商貿易の必要性を説いた。新島七五三太に函館を教えたのは三川であるとも言われている。

(2) 太山融齋

江戸浅草の町儒者であつたのを勝明の眼にとまり、安中藩に迎えられた。神道、仏教、儒教に通じるとともに西洋事情にもくわしく、藩主としても重きをなした。地球儀を作り水戸藩などへ進呈している。学者として山田三川とともに第一級の人物である。

(3) 岩井重遠

白湾は号である。漢学だけでなく数理にも明るかった。松井田町新井で塾を開いていた。勝明に見出されて、松井田町五料で郷学校「桃溪書院」をつくり、一般庶民の学びたい人を入れ学問をさせた。後に同志社大学のために尽くした。湯浅治郎、哲学博士で新体詩で活躍した湯浅半月らは、岩井重遠に学んだ。

(4) 田島順輔

近江国蒲生郡日野町で生れる。幼にして京都で和漢の学を修め、十五歳で大阪の緒方塾に入り、蘭学を修める。安政三（一八五六）年藩主勝明に招かれ蘭学を教える。この時新島七五三太は三人の若者の中に選ばれ、藩の命で蘭学を学ぶ。七五三太は十三歳であった。外国への関心が芽生える。田島は翌年長崎の海軍法術、蒸気機関などの修学のため幕府の命令で安中藩から離れた。安政六年長崎より帰る途中に病没した。

3、甘雨亭叢書の発刊

藩主勝明は文武を奨励した。その一環として先儒の著したものでまだ出版されていないものなどが忘れ去られることを恐れ、探し求めて『甘雨亭叢書』と名付けて出

版した。多くの藩士に配布し、読み学ぶように配慮した。

原版は八三六枚、勝明の著述の原版および刊行書の原版が二一八枚。合計一〇五四枚の量になっている。叢書は多くが漢文であるが、和文もある。当時幕府で刊行を許さなかった書物の版木もある。

安中市では版木を市指定の重要文化財にし、蔵の中に整理して保存している。時折市民に公開し勝明の偉業に思いを馳せている。

版木の目録は、紙幅の都合で割愛する。

4、武術に力を注ぐ

勝明は文に力を注ぐとともに武にも力を注いだ。幕末騒がしくなってきた、いざという場合に使える身体と、精神とが求められた。従来からの剣術、弓術、槍術などとともに砲術なども学ぶことをすすめた。根岸松齡、海保帆平、武井常次郎などすぐれた人々がいる。

この頃の砲術の師は星野閑四郎であった。

秘密事項が多かったためだろうか。藩士は起証文を書き血判を押している。その一部分をのせる。

起証文

御秘事一切親子兄弟たりとも他見他言仕間敷事

嘉永四（一八五二）年七月十二日

新島民治 花押血判

また別に、

文久二壬戌（一八六二）年正月二十八日

新島七五三太 花押血判

（年号は筆者が書き入れた。文久二年の時は新島七五三太は十九歳であった。）

安政の遠足

身体の鍛練と精神をきたえることを願って勝明は「安政の遠足」を実施した。これは安中城を出発し中仙道を走って、碓氷峠の熊野権現神社へ行くわけである。キロ数は約三十キロ近くである。峠道をのぼるので大変な距離になる。速さと、がまん強さを競ったわけである。

安政の遠足を現在も実施している。勝明の偉大さを偲ぶ一つでもある。出発点やコースは昔と同じである。毎年五月の第二日曜日に実施する。遠足保存会と安中市、松井田町の教育委員会が、主催である。参加者は全国から希望でこられる。本年は約八百人の参加であった。速さを競うことと、武士の仮装をしたり、弥次さん喜多さんの真似をしたり極めて多彩である。安中、松井田の大きな行事として定着している。

5、勝明の考え方、生き方

(1) 農民のことをいつつも

勝明は二十二、三歳の頃までは権力のある人の家へ入りして、少しでも地位官職の昇進することを願っていた。いわば権勢にこびへつらっていた。

程朱喜の書を読んで感ずるところがあった。人の人たるわけは、高位や高官になることではない。財宝をためることでもない。人の人である道を守ることである。藩主としての道は何か、何をすることか、を考え悟ったのである。

その後は高位の人、高官の家へは公の仕事がある以外は、一切出入りをしなくなった。ひたすら読書をし読書をすすめる、農民のこと領民の幸福のことをいつも考えていた。同志と書を読み文を論じ、道義を話しあっていた。国家の安危には心を留め、大砲の鑄造、藩士の教育、訓練、外国の情勢などに心を用いていた。自分の快楽やぜいたくなどは考えなかった。

勝明が江戸から安中へ帰って来た時など、多くの農民が村境まで迎えに出て、歓迎したと言う。

(2) 殖産に心を

現在、安中の新島家の旧邸には、新島襄先生の碑がある。その後方の塚のところに「漆園しつえんの記」の碑が建っている。文は山田山川が書いたもので、領内の空いている土地に漆うるしを植えることをすすめ、その利益を窮民の救済に充てたと言うことなどが書いてある。農民の生活の安定を願うてのことである。

(3) 火葬は不孝の極み

勝明の先祖の墓は愛知県にある。非常に遠いので火葬にしてなきがらを持つて行つた。父や母のなきがらを火葬にすることは、不仁の甚だしいもの、不孝の甚だしいものと勝明は思つた。火葬でなく土葬にするように言つた。家臣が火葬でもよいではないかと言つたところ、勝明はある本を示し、私の考えと同じく火葬は不仁だと言つている、と説明したと言う。

(4) 揮毫はしない

晩年になつて勝明の名声は、ますます高くなつた。水戸の烈公、福井の松平公などとの交際もあつた。群臣の中から、諸公の中からも、文士友人の中からも勝明の書をお願いするものが多数出てきた。勝明は堅く辞退した。私は書を残すほどの者ではない。謙虚に断つて一書

もしなかつたと言うことである。

三、藩主勝明のこと

私（七五三太）の藩主は中国の古典に精通しており、国内では藩主たちのうち最も傑出した学者として有名であつた。先見の明があり目的意識もはっきりしていた。将来性のある若者は軍事専門学校に入学させた。また老人を除くすべての者に剣術、馬術を受けさせ、漢学所を設け、義務教育をほどこした。

オランダ人が日本に持ちこんだ大砲や小銃を買うため、農民や商人から余分の税金を取ることほしないで、藩内の仏教寺院から青銅の鐘を求め、野砲や臼砲をつくつた。すべての藩士が大砲や小銃を持つようにした。

私は藩主の命を受けて、馬術の塾に通い始めたが、馬術は全く駄目で馬の背中で、運ばれている感じであつた。漢学に対する興味が出てくるとともに、さらに漢学の勉強に懸命に打ちこんだ。藩主は私を漢学所の助教師に昇進させた。それ故漢学研究に一層興味が加わつた。

蘭学を学びさらに友人にアメリカの地理や歴史の本を借りて読み頭がとろけるようになってしまい、何回も何回も読みかえた。アメリカの大統領は、国民のことを

考えて政治をしている。日本の將軍は自分のこと、將軍家のことを考えている。將軍家一族を考えている。アメリカのようにならなくてはと思つた。私は（七五三太）汽車や電車、各種の学校、感化院、工場などのことを本で読むのでなく、アメリカの文化をじかに学びたい。そうして日本の国を少しでもよい国にしたいと願うようになった。

四、藩主勝明の他界、勝股のこと

心から慕っていた勝明は、安政四（一八五七）年四月十日に亡くなつた。四十八歳の若さであつた。七五三太は十四歳であつた。勝明は男子が七人いたが、みな若いうちに他界してしまい、残つた男子も間もなく亡くなつた。やむを得ないので弟の勝股かつまたがあつた。

七五三太は脱国の理由、（全集十巻）の中でつぎのように述べている。

殿様の事務所へ出ましたが、何一つ用事がないので、蘭学の教師のところへ行つた。帰つてくると殿さまがいた。（勝股）殿さまは私を殴りつけた。

「どうして事務所をぬけたのですか」

「私は外国の知識を学びたいのです。外国のことを早く

理解したいのです。」

「もうこれつきり逃げ出さないとこのなら、給料をふやしてやろう。」

その後仕事は忙しく逃げ出せませんでした。勝股は人事については、妾の意見を聞き、それによって実行した。自分の安全のために警護に若い人を使用した。十七歳の時に七五三太は藩主勝股の護衛役で、安中へおとずれて

いる。勝明と勝股とを比べると、月とすつぽん程の違いがある。勝明は読書をすすめ勉強をすすめ武をすすめ、立派な藩士になるように願っていた。藩士のこと農民のことを考えていた。勝股は自分のことが主で農民のことなど考えなかつた。七五三太は勝明を偲び、尊敬するともに勝股に対しては、偲び難い思いで、命令に服していた。勝明があと十年も生きていたら七五三太の人生も変つていたのではなからうか。勝股に仕えることは苦痛であつた。

五、天父の発見

十九歳の頃世界情勢へのなやみと、勉強へのなやみで奇立ちを覚える毎日であつた。この時一人の友人を得た。

彼は多くの本を持っていた。七五三太の好奇心をかきたてたのは、中国語で書かれた聖書であった。
 私たちが生きている世界は見えない神の御手によって創造されたものである。神の名前が「天父」であることを知った。七五三太の心に神に対する大きな尊崇の念をかきたてた。「もはや自分は父母のものではない、神のものだ。」と思った。私は自分自身の道を進むべきであると感じた。私は地上の両親よりも一層天の父に仕えなくてはならない。この新しい考えが力づけた。私は断然藩主を見棄て、また一時的にも家をも祖国をも離れる決心をした。

(歴史家)

新島襄関係文献(抄)

- | | | | |
|--|----------|-----------------------|-----------|
| 『新島襄全集』全十巻(刊行中) | 同朋舎出版 | 徳富蘇峰著『新島襄先生』 | 同志社大学出版部 |
| A. S. HARDY, LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NEESIMA | 同志社大学出版部 | 魚木忠一著『新島襄一人と思想』 | 同志社大学出版部 |
| 『同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意』口語改記並原文一 | 同志社 | 岡本清一著『新島襄』 | 同志社大学出版部 |
| 森中章光編『新島先生書簡集』正・続 | 同志社 | 渡辺実著『新島襄』 | 吉川弘文館 |
| 同志社編『新島襄書簡集』一岩波文庫 | 同志社 | 森中章光著『新島襄先生』 | 同志社新島研究会 |
| J・D デイヴィス著・北垣宗治訳 | 同志社 | 加藤延雄・久永省一共著 | 同朋舎出版事業部 |
| 『新島襄の生涯』 | 同志社 | 吉田曠二著『新島襄―自由への戦略』 | 新教出版 |
| 『新島先生記念集』 | 同志社 | 井上勝也著『新島襄 人と思想』 | 晃洋書房 |
| 『明治文学全集第四十六巻』新島・植村・清沢・網島集一 | 同志社 | 北垣宗治編『新島襄の世界』 | 晃洋書房 |
| J. D. DAVIS JOSEPH HARDY NEESIMA | 同志社 | 同志社社史資料編集所編 | 同志社 |
| 『同志社百年史 通史編Ⅰ・Ⅱ』 | 同志社 | 『同志社百年史 資料編Ⅰ・Ⅱ』 | 同志社 |
| 森中章光編著『新島襄片鱗集』 | 同志社 | 和田洋一著『新島襄』 | 日本基督教団出版局 |
| 森中章光編著『新島襄先生評年譜』 | 同志社 | 同志社社史資料室編『創設期の同志社』 | 同志社社史資料室 |
| 永澤嘉巳編『新島八重子回想録』 | 同志社 | 同志社社史資料室編『追悼集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』 | 同志社社史資料室 |
| | 同志社 | 雑誌『新島研究』 | 同志社新島研究会 |
| | 同志社 | 雑誌『同志社談叢』 | 同志社社史資料室 |

添川完平と新島七五三太

川口芳昭



添川完平の肖像画

上州安中藩（群馬県安中市）七代藩主板倉勝明侯の藩政を支えた三人の儒者があった。太山融齋、山田三川、添川廉齋の三人で、「安中の三儒」と言われた。

藩主勝明侯は文化六（一八〇九）年に生れ、十二歳の文政三（一八二〇）年五月襲封。天保十四（一八四三）年十一月奏者番になったが、翌年病気のため辞職した。生来学問を好み、林檎宇・古賀侗庵に経書と歴史をきき、篠崎弼（小竹）・後藤機（松陰）を召して文を談ずるなど、明敏な才能は広く知られていた。著書には西征紀行、東還日記、中禅寺紀游、また慶長元和以来の諸儒の著述の散逸するを憂い、これらを集めて「甘雨亭叢書」を刊行している。甘雨又は節山人を号し、字を子赫とした。

また藩校造士館（文化五年成立）の充実、殖産につとめ、藩士に西洋砲の操練を学ばせるなど、三万石の小藩ではあったが、水戸の徳川斉昭公とも親しく、開明の藩主として名があつたが、惜しむらくは安政四（一八五七）年四十九歳の若さで世を去つたことである。

三儒の一人太山融齋（一八〇〇〜五一）は、名を誠、字成言、通称呉一郎、書癖、梅所、梅翁と号した。江戸浅草田原町で町儒者をしていた所を、勝明侯に認められて五十石で安中藩に迎えられた。融齋の文教政策は水戸藩の線と同じくするもので、神・儒・仏に通じ、遺著「小学入門」は水戸領の村々にあつた義学（有志の寄附によつて営まれた無月謝の学校）のことを細かに説いている。また地球儀七個を製作して水戸藩その他に贈つた程、西洋事情にも通じていたという。

山田三川（一八〇四〜六二）は、通称三郎、名飛、字致遠、三川・四有の号があり、諱は載飛又は載鳴。伊勢国三重郡平尾村の医師の子として生れ、文政八（一八二五）年二十二歳の春江戸に出て古賀侗庵の門に入り、次いで昌平校に学ぶ。後昌平校の舎長となるが、たまたま天保の飢饉に遭つて刻苦した。天保九（一八三八）年岡本花亭・松崎慊堂の斡旋で、松前藩に百五十石人扶持で仕えた。幼君の補導に任じ、藩内有識の人々に重んじら

れたが、小人輩の妬をかい、嘉永六（一八五三）年江戸出府中永の暇を申付けられる。その後復帰を請われたが諾せず、水海道（茨城県）に流寓していた。この間藤田東湖ら水戸藩の儒者と親交があつて、藩主斉昭公の知るところとなり、水戸藩への出仕の誘いもあつたが辞退、斉昭公の紹介で安中藩に五十石で抱えられることとなつた。時に三川四十九歳であつた。格式給人、安中儒者役、郡奉行助勤、御勝手掛りとなり、安政元（一八五四）年養育奉行（墮胎取締り）、同二年安中郷学校設立、同三年下総領の取締改革、郡奉行となつている。藩校造士館で経学・詩文及吏事・経済学を講義しているが、典籍の解釈にのみ空費することをやめ、産業経済の必要を力説し、通商貿易の大切なこと、従つて航海術を学ぶべきことを教えている。蘭学者の渡辺華山・高野長英などとも親交があり、佐久間象山も旅行の途次彼の家に草鞋を脱いでいる。

添川完平の生い立ちと業績

完平は享和三（一八〇三）年十二月十五日小荒井村（現福島県喜多方市）に生れる。父清右衛門、母とみの次男。幼名亀次郎。名完平、諱栗、字仲穎、晩年寛夫と改める。

廉斎は号、また頼山陽に贈られた所有不為斎の別号もある。

添川家は舞台田村（現喜多方市慶徳町内）の肝煎（庄屋・名主と同じ）家の出で、小荒井村に分家して、農業の傍ら染業を兼業としていた。次男として生れた完平には染業をもつて家を興させようとした親は、完平十二、三歳の時上三宮村（現喜多方市三宮町内）の大野権右衛門家に徒弟として遣わされた。しかしそれより前小洗寺の修験から読み書きの教えをうけた完平は、暇さえあれば本をひらき、読書に余念のない少年になっていた。そんなわけで、徒弟に出されても仕事に身が入らず、一年程で家へ帰されてしまった。完平は気兼ねなく読書が出来ること、かえって喜ぶ有様であった。親もこれを見て家業を継がすことを諦め、望むことに進ませることとした。

十四歳の時、会津藩士黒河内重太夫（八百石）の下僕となり、次いで軍事奉行広川庄助（七百石）の従僕となつた。

昼間は主家の仕事を勤め、夜になると専心読書に耽り、眠くなるとその儘机に伏し、覚めると又読書するといふ有様で、そのため頭髮の大半は焼けこげ、衣服は燈油が染みて臭うほどであった。主人が外出する時は本を懐に入れて従い、待つ間本をひらき、主人が登城する時は他の

従僕のように雑談して待つのでなく、一人離れて本を開いて倦むことがなかった。他家の従僕の嘲笑も意に介さない姿に、主人の庄助は他日必ず大成するであろうと、江戸詰めの時完平を伴い、聖堂の師範依田源太に托した。完平十八歳の時であった。後に古賀穀堂の門に入り三年間苦学する。

一応学成つて全国周游を思いたち、先ず京都に赴き頼山陽に従う。山陽完平の詩文をみて、その才能の優れるを知り、山陽の「日本外史」の仕事を手伝わしたという。次いで備後（広島県）福山に菅茶山の塾に遊ぶ。茶山からも学識を愛され、茶山に代つて左氏伝の書を講説している。

次いで九州に遊学、広瀬淡窓を訪ね日をかさねて滞留。淡窓はこれをよろこび詩をよんで贈っている。

益々学業が進み、天保十（一八三九）年大阪に至つて、詩文を篠崎小竹に問う。完平は性温雅であるが、思い切つて実行する優れた才能をもち、詩文を最もよくしたが、山陽の薰陶をうけて国家を念頭において、物事を考究するようになっていた。

篠崎小竹（一七八一〜一八五二）は尾藤二州・古賀精里に字んで大阪に帰り、養父に代つて子弟の教育に当り、出仕を好まず諸藩の招聘にも応じなかったが、大阪在勤

の大名の中には教えを乞うものが多かった。

安中藩主板倉勝明侯もその一人であった。大阪加番の都度小竹を招いて詩文を談じていた。天保十年加番で上阪した際、小竹は完平を薦め会わした。忽ち勝明侯の気に入られ、賓師として安中に迎えられることとなった。

完平はその知遇に感激し、藩政の諮問には知って言わざるなく、言って容れられざるなく、風俗を矯正し、文武を奨励し、士気を振作し、庶政大いに挙げ藩風が一変したという。勝明侯は常に人に語って「添川寛夫は予が畏友なり」と言っていたほどである。

昭和十七（一九四二）年孫の中野同子あつこによって出版された『有所不為齋雜録』（原本三二冊を三集にまとめたもの、総頁一〇四〇ページ）は、天保十五（弘化元年）年「長崎雜録」から書きおこして、安政五年（完平没年）まで書き続けられているが幕府の中樞にでも居なければ知ることの出来ないような内容が書き記されている。書き出しが勝明侯が天保十四年奏者番になった時と機を一にしているので領けるが、翌年辞職後も同じく書き続けられている。特に異国との外交交渉のやりとりの文書、外国使節との対談、海防についての幕閣有志の意見、或いは多くの人の聞書を書せ、しかもそれらは詳細を極めてい。実に驚くべきことである。いかなる立場にあれば

こんなに詳述できたのであろうか。この雜録が内閣文庫に蔵められた所以も領けるような気がする。

勝明侯は水戸烈公（斉昭）と共に憂国の志を抱いて好みを通じていた。完平もまた侯に従って烈公に謁し、諮問に答えた。前記雜録にあるような豊富な情報は、二人の藩主にとつて欠かすことの出来ないものであったと思われる。

弘化元（一八四四）年五月六日幕閣にきらわれた烈公は、隱居謹慎の身となった。完平はこのような重大な時局に、烈公の失なわれるを憂い、諸名士を訪ね、上下に周旋し救解に奔走した。そのような働きかけが奏を効してか、同年十一月二十六日謹慎が解除された。烈公は完平の努力に感謝して、自作の茶碗と茶台を完平に賜った。完平は儒者であり漢学者であるが、自らも蘭学を修め、世界の大勢に通じた経世家として知られていた。詩文に長じ、また農家の出であるが撃剣に妙を得、諸国周游の時には各地の劍客を訪ね技を磨き、武士に劣らぬ力量であったという。

安政五（一八五八）年背に癰よを発し、医療の効なく六月二十六日江戸中屋敷で死去、五十六歳であった。その前年の四月十日、完平を重用した勝明侯も没している。

完平と七五三太

新島七五三太（裏の幼名）は、天保十四（一八四三）年江戸神田の安中藩邸で生れた。一月十四日まだ松の内であったので、七五三繩に因んで七五三太と命名したといふ。

十歳の姉をかしらに四人の女の子の後に、初めて男児が生れたので、家族の喜びは大変なものであった。

新島家は妙義山麓郷原村土着の農民であったが、祖父弁治の代に安中町に出て、藩主板倉家に仲間奉公したのに始まる。身分は足輕以下であったが、弁治は磊落で進歩的で、かつ文才があつたことから、漸次認められ江戸表に奉公するようになった。徒士小姓から中小姓格、そして中小姓に昇進し、藩主勝明侯から多大の信任をうけ、七十八歳の高齡迄勤めている。

父の民治は右筆職であつたが、家では内職に手習師匠をしていた。保守的な人であつたという。

七五三太の教育は六才の頃から始められた。それは父民治が右筆職の後嗣ぎとして仕込んでおこうと読み書きが主であつた。嘉永六（一八五三）年安中藩江戸屋敷学問所に入って、添川完平（廉齋）について漢籍を学び始

める。また武士としての剣術・馬術の稽古も始める。

完平は「常によく高明なる識見に立つて時事を論評し、経国済民、富国強兵の実を挙げんとせば、よろしく外国の言論を学び、進歩せる西洋の学術を修めなければならぬと、平素口癖のように藩の子弟に教えていた」（森中章光『新島襄先生の生涯』）というから、教場には活気が満ち満ちていたようである。

後に新島襄が添川廉齋を評して次のように言っている。「当時君（板倉侯）側の儒者添川廉齋は、一道学者と思いきや、實際政治家であり、世界の大勢に通じたりしこと事実なり、而して、経世家たる第一資格に於いて、必要なる蘭学を君公に吹き込まれき。勿論、氏自身としても兀々蘭書を繙きしことは、詩によりて知るべし。

和戦紛々孰是非 且看人事與天時 群卿讜議雖尤善
當路苦辛容不思 古法今來異其俗 冬裘夏葛有攸宜
書窓兀兀繙蛮籍 狂使吾曹中夜悲

（根岸著『新島襄伝』）

七五三太少年は十四歳の時、藩主の命によつて田島順輔（安中藩士、蕃書調所教授）に蘭学を学ぶことを命じられた。完平は七五三太に「汝、蘭学を学ばんとて漢学を廃する勿れ、今たとえ勉むと雖も、漢学を知らざれば何をか成すを得んや」と忠告している。

また同年、藩内から三人の若い人を選んで杉田玄瑞（医師・玄白の嗣、外国奉行支配翻訳御用頭取）を招いて、蘭学を勉強させたが、その中に七五三太も選ばれている。玄瑞が幕命によって長崎に行ったため、七五三太らの蘭学研究は短期で中止となったが、蘭学に対する勉学の熱望は、すでにこの頃から已みがたきものになっていた。そして二十二歳の元治元（一八六四）年、函館から米船ベルリン号に乗り込んでアメリカに密航する決意をいだかせたのは、「当時であって彼等（添川・山田・杉田）が如何に先見遠識の人物であり、時流を擢んじた進歩主義の人物であったか」ということは、以て知るべしであるが（中略）十四五歳前後の少年七五三太は、かかる人物のもとにあつて、藩士の子弟として特別に薰陶され教育されたわけで、この時代に七五三太が、彼等の精神的影響、人格的感化を蒙り、思想的教導を受けたことは、明らかなることであり、彼が、剛胆俠気の祖父、謹厳実直の父、温和従順の母を有する家庭的感化以外に、日に伸びゆくかとせる七五三太の魂に働きかけた力は、必ずや深く、大なるものがあつたにちがいない。」（森中章光『新島襄先生の生涯』）また「新島の蘭学研究の意欲をかりたて、遂に海外雄飛を断行させるに至らせた誘因となつたことについては、勝明をはじめ添川・山田・杉田などの学者

のあたえた啓蒙と、藩主勝明の藩政に対する積極的施策を見逃してはならない。数多くの人々からの感化が累積・結集されているのである。」（渡辺実『新島襄』）

いづれの著者も安中藩の開明的藩風が、七五三太の少年期から青年期にかけて、大きく影響したことをあげている。そしてその藩風刷新の一翼を、東北の一寒村、しかも保守的風土の会津の地から出た添川完平が担つたことと意義は誠に大きい。

その薰陶をうけた七五三太が、後にキリスト教的精神主義教育を強調、純粹な信仰と熱烈な人格をもつて教育にあたり、日本の近代的思想の開拓者となつた。しかもそのよき理解者となり、同志社創設に力をかけた山本覚馬、そして新島夫人八重子（覚馬の妹）、いづれも会津の人であることに奇しき因縁を感じる。

（会津史学会員、喜多市岩月町在住）

◇参考資料

『添川完平先生略伝』（SH・添川廉斎先生建碑事務所）

『新島襄』（日本歴史学会編、人物叢書、渡辺実著）

『新島襄先生の生涯』（森中章光著、不二出版）

『安中市の文化財』（安中市教育委員会）

『有所不為斎雜録』『廉斎遺草』（中野同子編）

ハーディー夫妻と新島襄



ハーディー

井上勝也

新島襄の伝記 *Life and Letters of Joseph Hardy Nesima* を読むと、新島はハーディーよりも夫人に、より多くの手紙を書いていることが判る。小切手を送ってもらったお礼や、休暇と一緒に過ごすようにという手紙に対するお礼の手紙は、夫人が日常きめ細かく彼に母親的気配りをしていることを示している。

新島が一八六五年、二二歳でニュージーランドに着いたとき、五〇歳のハーディー夫妻（同い年）は四人の息子（二五歳、二二歳、一八歳、一二歳）の他に親友 J・シアーズの遺児（一〇歳）を養育していた。社会奉仕活動に多忙な貿易商の夫とともに、自らも奉仕活動に精を出す夫人は、五人の息子たちに加えてもう一人の息子ジョゼフ

を抱え込むことになった。

新島はアーモスト・カレッジ時代の一八六八年二月、ミス・ヒドゥンに宛てた手紙の中で次のように書いている。「ハーディー氏は（アーモスト・カレッジの）理事会に出席して多忙でしたが、夫人は私の部屋にやって来られ、二時間も私のところに留まりました。彼女はアーモストの町に多くの友人をもつておられますが、私以外に誰をも訪れませんでした。私は彼女の仁愛にいつも感謝しています。彼女は私のために厚い毛のシャツを二枚とズボン下と長靴下をもつて下さいました。彼女は私がアーモストにさらに一年留まって勉強することを許して下さいました。ですからギリシア語とラテン語を勉強



ハーディー夫人

する機会ができそうです^①。この手紙は、厳しい冬の始めに、リユーマチの持病をもつ息子を気遣って、夫と共にボストンから片道四時間の汽車に乗り、アーモストに着くや早速寮にいる息子を訪ねて、暖かい毛の肌着を手渡し、勉強のこと、家族のことを語り合う母親と息子のほほえましい姿を彷彿させる。

新島はアンドーヴアー神学校時代もリユーマチに悩まされた。一八七一年二月、ミス・ヒドゥンに宛てて次のように書いている。「……私は（寮の）階段を降りようとしていましたが、できませんでしたので、友人が、丁度母親が赤ん坊を抱きかかえるように、私を抱きかかえ、三階から降りしてくれました。彼は私を特製のソリに乗せて駅まで運んでくれ、ボストン駅に着くとハーディー氏のソリが待っていました。それで私は全く寒気にさらされずにハーディー家まで運ばれました。ハーディー家に着いて以来、私の健康は急速に回復し、部屋は常に一定に暖められ、私が食べるあらゆる食物は私のような病人にはすばらしく適したものでした。私の部屋は三階にありますが、時にはハーディー夫人の部屋へ行き、彼女が私のために読んでくれるものを聴いたり、茶の間に降りていき、沢山の骨董品や絵を見て楽しんでます^②。この手紙からハーディー家の息子として完全にハーディー家に

溶け込んでいる新島を見ることができるといえる。

新島は一八八七（明治二〇）年一月二〇日、チャペルで恩人ハーディーの追悼説教をおこない、ハーディーを「米国の父」と呼び、「予ノ如キハ君ノ恩顧ヲ蒙ルル事泰山ヨリモ高く、北海ヨリモ深シ」いものがあつた、と述べている。彼は最上級の表現でハーディーに対する感謝の気持を示しているが、彼にはハーディーに対する感謝の気持を示しているが、また彼自身の生涯も決定的に異なつたものになつたという自覚があつたからである。彼にとつてハーディー夫妻は実の両親以上に大きな存在であり、彼の生涯に出会つた多くの心友・隣人の中でも最上級の心友であつたといえる。

それではハーディーとは如何なる人物であつたのか。ハーディー (Alpheus Hardy, 1815—87) は一八一五年、マサチューセッツ州ケープコッドのチャタムで生れた。父親は村で万屋を営んでおり、その店は村民が集まつて何でも気軽に話し合える社交場でもあつた。ハーディーは幼年期に父の店に入りする船乗りたちの外国の話や海のロマンを聴いて育つた。一六歳の時、彼はボストンに出て店員になつたが、まもなくやめ、フィリップス・アカデミーに入学した。将来牧師になつて直接神に仕えることを夢みていた彼は、一九歳の時重い病気に

かかり、アカデミーを中退せざるをえなくなつた。中退することは牧師への道を断念することになるので、苦惱の日々が続いた。しかし或る日、彼は次のように悟つてこの難問を解くことができた。「私は説教するのと同じ情熱をもつて商取引において神に仕えることができる。そして神のためにお金をもうけることは私の神聖な天職にならうという新しい希望が湧いてきた。おお神様、私は貴方の僕になることができます。私はボストンに戻つて、神のためにお金をもうけるでしょう。そしてそれが私の聖職となるでしょう」。ハーディーはこのようにして見事に職業 (Beruf) 選択の難問を解決し、彼の生涯を通してカルヴァン (J. Calvin) 的な職業観を貫くのである。

一八三四年、一九歳のハーディーは商売を始め、故郷を同じくするシアーズ (J. Sears) に財政的援助を受けた。一八三八年、二二歳でボストン出身のホームズ (S. W. Holmes) と結婚した。ハーディーは友人と大西洋沿岸貿易を始め、一八四五年にはそれを地中海、東インド、中国、南米にまで拡大している。三年後、三三歳の時、彼は協同者と別れ、独自で貿易を続けることになつた。

さて、この頃からハーディーはいろいろな社会的名誉職を引き受けている。一八四九年、彼はボストン海員の友協会の会長に選ばれ、夫人も女性海員の友協会の副会

長になった。新島が一八六五年九月末、東ボストン港でハーディー夫妻に会い、夫妻から海員の家に泊まって密航の理由を書くように求められた時、ハーディーは当協会の会長であったことになる。

一八五五年、彼はフィリップス・アカデミーとアンドーヴァー神学校及びアームスト・カレッジの理事を引き受け、前二校は亡くなる二年前の一八八五年まで三二年間、アームスト・カレッジは二二年間もその地位にあり、これらの学校の発展に貢献した。異邦人新島が名門校フィリップス・アカデミーやアームスト・カレッジに入学できたのは、理事であるハーディーの力があつたと考えらるべきであろう。

さて、ハーディー夫妻は新島に最初に会つた時、彼らの質問に充分答えられなかつた新島に手記を書かせたが、夫妻はつたない英語で書かれた、彼の生い立ちから始まる詳しい密航理由書に心を動かされた。この手記から彼らは新島の人となり、誠実さ及びキリスト教や高等教育を学び、祖国の近代化に貢献したいという青年の壮志を充分に理解することができた。ハーディーは早速フィリップス・アカデミーのテイラー校長に連絡し、自ら新島をアンドーヴァーにつれて行き、校長のアドヴァイスで彼を寮に入れずにホームステイさせることにした。

校長に推薦されたヒドゥン家では異邦人が同居することに最初躊躇するが、ハーディーの説得と新島の手記を読んで、アメリカの生活方法に慣れていないこの日本人をホームステイさせることにした。ミス・ヒドゥンは二ヵ月後にハーディーに宛てて次のように書いている。「私どもはジョゼフが紳士 (gentleman) であることが判りました。……私どもは彼を家族の正規のメンバーとして遇っています」。

一八五七年、ハーディーは四二歳の時、アメリカン・ボードの評議員と運営委員会のメンバーに選ばれ、亡くなる前年の一八八六年までその地位にあつた。その間、一八七三年には運営委員会の議長に就任、ボードは同志社に一八七九 (明治一二) 年に八千ドル、一八八四 (明治一七) 年には五万ドルを寄付しているが、陰にハーディーの尽力があつたものと考えられる。

一八六一年、ハーディーが四六歳の時、マサチューセッツ州の上院議員に当選した。熱心な共和党員である彼は南北戦争時、北軍の形勢が悪くなるや、連邦債を大量に買つて政府を支援した。ハーディーは州議会に一期しか在籍しなかつた。その後ボストン市長に指名されたが、辞退している。

南北戦争時、ハーディーの経営する Alpheus Hardy &

Co. は一七隻の貿易船を世界の海に就航させていた。

一八七六年、シーリー総長の時代に、六一歳のハーディーはアーモスト・カレッツジの理事を辞任した。カレッツジは彼を二二年間にわたる有能な理事として高く評価し、次のように述べている。「彼のビジネスの知識及び経験はアーモスト・カレッツジに計り知れない価値をもっていた」。

一八八六年、ハーディーは七一歳にして三〇年間勤めたアメリカン・ボードの評議員及び一三年その地位にあった運営委員会の議長を辞任した。「彼の運営委員会に対する奉仕は最高に価値あるものであった。……彼の名前はボードの基金に信用をつけ、彼の財布は常にその必要性を満たすために開かれていた」。

一八八七年八月七日、ハーディーは敗血症のために亡くなった。七二歳であった。彼の死は全く偶然の出来事の結果であった。五月二九日、彼はクーポンを鉄で切っていて、誤って鉄を足の上に落した。刺さった傷口から細菌が入ったのである。新島が J・M・シアーズによって打たれた電報でハーディーの死を知ったのは札幌においてであった。彼はショックのためにその夜から再び心臓の状態が悪化した。当日の日記に「嗚呼、氏ハ予ガ日本伝道上ニ〔無〕比ノ良友、又予ガ米國ノ父トモ称セシ

人ナリ。嗚呼良友往焉、予ノ心ヲ如何ニセン。米國之慈父ヲ失フ、予ハ孤中ノ最不幸ナル孤ナルカ」と記している。

新島は一八六五年以来ボストンの自宅で、時にはメイソンの別荘で、ハーディー夫妻と共に生活し、アメリカン・ボードの年会に出席してハーディーの公・私の生活をつぶさに見、また二二年間、極めて簡潔にして要を得たハーディーの手紙を通して、彼の人となりを肌で理解していたが、彼は追悼説教で恩人ハーディーを次のように述べている。「君ノ人トナリヲ論ジマスレバ、君ハコンモンセンスト判断力ニ富ミタルモノニシテ、其ノ言語挙動一々宣シキニ適ハザルナク、又実地ノ点ニ出デザルハナシ、其ノ性謙遜ナルモ快濶ニ、簡易ナルモ卑浅ナラズ、閑雅ナルモ自ラ威厳アリ、溫柔ナルモ決シテ侵スベカラズ、真ニ君子ノ風ヲ備ヘリト申スベシ、(中略)且君ノ畢生ノ目的ハ天意ヲ奉戴スルニアリテ、君ガ世人ヨリ信任ヲ受ケシモ、事業上功ヲ奏セシモ、広ク慈善ノ働キヲ為セシモ、皆尽ク此ノ一点ニ基イ〔テ〕セシ事ト思ハレマス」。

以上のようにハーディーの人となりを洞察する新島は、次に実業家ハーディーの成功の秘密を次のように挙げているのは興味深い。彼の慧眼といえよう。「第一好

デ聖書ヲ読ミ祈禱ヲ常ニセシ事、第二 コンモンセンスト判断力ニ富ミ、見キリガヨク時機ヲ誤ラザル事。第三 不怠智識ヲ養成セシ事、友ヲ長者ニ求メシ事、第四 勉強シテ其ノ職業ニ怠ラザル事、第五 注意力ノ盛ナリシ事、第六 人情に暁通シ人ヲ見分ケタル事、第七 活眼ヲ以テ古今ノ歴史ヲ看破シ実施上ノ助ケトナサシメシ事、第八 当時ノ事情ヲ明カニシテ将来ヲ推測セシ事、第九 無益ニ金錢ト時間ヲ費サザル事、第十 非常ノ働キヲ為サン為ニ非常ニ休息シ、又美術ヲ愛シテ已レノ鍔ヲ養ヒシ事、第十一 事々ニ少シモ油断ノナキ事^⑩。

新島はハーディー夫妻に夫婦の模範を求めていることが判る。君ガ此ノ貴女婦ト偕老ノ契ヲ結ビシ事ハ君ノ生涯ニトリ一大事ニアリマシテ、君ノ事業ヲ成ラシメシモ全ク此ノ神ヲ敬マイ基督ヲ信ズル温和ニシテ賢明ナル婦人ノ助ナリト存ジマス。予ハ久シク君ノ家ニ止マルノ幸ヲ得テ自ラ琴瑟調和モ只ナラザル此ノ好夫婦ノ挙動ヲ目撃シ、君ノ妻君ニ対スル懇切ナルト又妻君ガ君ニ竭スノ周密ニシテ抜ケ目ナキ事ニハ驚キ入りマシテ、此ノ夫婦ハ真ニ佳適ノ配偶ニシテ世人ノ手本トナルベキモノト称ヘマスルモ決シテ過言ニアルマジト存ジマス^⑪。

新島は彼の生涯の半分近くの一二年間、ハーディー夫妻と交わり、両者の精神的絆や信頼感は「いしかね」の

如く堅固であつた。上述の如き彼の追悼説教は長い交わりを通して得られたハーディー夫妻の総括的評価であり、感謝の言葉であつた。彼がこのような夫妻像を描くことができたのは、逆に夫妻も新島を信頼し、彼の人格を高く評価し、民族を越えて、隣人として、イエスの子として実の息子と別け隔てすることなく彼を極みまで愛するだけの雅量をもっていた人達であることを意味する。

新島は初対面の人間に、或いは短期間の付き合いで相手に大きな信頼感を与え、彼のために喜んで献身する氣持を抱かせる不思議な力をもっている。箱館で福士卯之吉が危険を冒して新島の密航を幫助したのは彼らが最初に出会つてから未だ二週間しか経つていなかった。同じく新島と八歳年上の沢辺数馬は初対面で「旧知の如く」親しく交わる仲になつた。セイヴォリー船長はたつた一回の出会いで新島に上海までの乗船を許した。新島の生涯にはこれらの他にテイラー船長やヒドゥン姉弟、フリント牧師夫妻、シーリー教授夫妻、田中不二麿、山本寛馬、デイヴィス、ラーネツドなど、困難を厭わず新島のために尽力した人々がいる。そして四七年間の燃えるような新島の生涯を側面で支え、彼を理解し、激励し、協力をおしまなかつた多くの心友の中で最大の心友が典型

的なピューリタンであるハーディー夫妻であったといえよう。

新島はハーディー夫妻から人間、キリスト者、実業家、政治家、夫、妻、父親、母親の理想像を見出し、夫妻から全てを吸収して彼の人生観を構築した。そして彼はハーディー夫妻のように、神を信じ、神の思召しに従って、ひたすらに人を愛し、国を愛し、「世の中のため」に自己の生を燃焼させたといえるのではなからうか。

(大学文学部教授)

- ① To M. E. Hidden, Amherst, Nov. 14, 1868. 『新島襄全集』6巻 四四〇ページ
- ② To M. E. Hidden, Boston, Feb. 10, 1871. 『全集』6巻 八一ページ
- ③ ハーディー氏ノ生涯ト人物『全集』2巻 四〇八ページ
- ④ 同 右四一〇ページ
- ⑤ Alpheus Hardy's Ordination, *The Congregationalist*, Vol. LXXVIII, 31 August, 1893.
- ⑥ A. S. Hardy (ed), *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, 1891, P. 51.
- ⑦ W. S. Tyler, *History of Amherst College during its First Half Century 1821—1871*, 1873. P. 508.

⑧ *Missionary Herald*, September 1877, P. 342.

⑨ 出遊記『全集』5巻 二九九ページ

⑩ ハーディー氏ノ生涯ト人物『全集』2巻 四一一—二ページ

⑪ 同 右四一三—四ページ

⑫ 同 右四一〇ページ

ハーディーの生涯については、拙著『新島襄 人と思想』Ⅲ新島襄の恩人ハーディー人と生涯 (P. 61—78) から抜粋した。



W・J・ホランドと新島襄

北垣宗治

ホランド William Jacob Holland, 1848-1932 と新島とは一八六八年八月から翌六九年七月までの一年間にわたり、アーモスト大学北寮 North College の第十三号室に共に住んだ。アーモスト大学に入学したのは新島の方が数か月早かった。ホランドは一八六八年一月に三年次生として編入を許された。新島の方が五歳年長だったが、ホランドが両親にあてて書いた手紙から察する限りでは、ホランドの方が精神的に先輩ぶっているように思われる。これは悪い意味で言っているのではない。新島に対する一種の保護者意識、言い換えれば、当時のアーモスト大学でも全く珍しかった日本人留学生第一号に対する一種の宣教師的意識といったものが感じられる。ホラ

ンドはモラヴィア派の宣教師の長男だった。ルームメイトとしては新島がホランドを選んだのではなく、ホランドが新島を敢えて選んだのであったことが、両親あての手紙から読み取れるのである。

ホランドは一八六九年六月にアーモスト大学を卒業したのち、シリー教授らの推薦で短期間アーモスト高等学校の校長をつとめ、さらにマサチューセッツ州ウスター市の東隣の町ウエストボロの高等学校長を一年半つとめたのちプリンストン神学校で勉強し、一八七四年四月からピッツバーグのベルフィールド長老派教会の牧師になった。牧会生活十七年のうち一八九一年に西部ペンシルヴァニア大学の学長に選ばれ、十年間の在任期間中にこの大学が今のピッツバーグ大学に発展するための基礎を築いた。学生時代から生物学、鉱物学等に興味を抱き、牧師としてよりも博物学者として名声をあげ、昆虫学、動物学、古生物学等の分野で世界的な権威とみなされるようになった。ピッツバーグのカネギー博物館は主として彼の構想に基づいてつくられたもので、その初代館長を一八九七年から一九二二年までつとめた。

新島研究の観点からホランドが重要である理由は、彼が無類の手紙書きであって、毎週一度必ず両親宛てに書いた手紙がほぼ完全な残りで残っているからである。

親許をはなれて学校生活を送っている子供が週末ごとに両親あてに手紙を書くという習慣は、電話の普及していなかった時代の、殊に宣教師の家庭では重要な習慣だった。ホランドの場合は高校、大学時代につけた習慣は第二の天性となり、神学校時代はもちろん、結婚後もなお続いた。これらの手紙はすべてホランド文書としてピッツバーグ市の西部ペンシルヴァニア歴史協会 Historical Society of Western Pennsylvania に保管されている。

彼の手紙はアーモスト大学の二八六八年から六九年にかけての状況をいきいきと伝えてくれる。新島のアーモスト大学時代を知るには、彼のハーディー夫妻あての手紙、ミス・ヒドンあての手紙と並んで、ホランドの両親あての手紙が有力な資料となるのである。

新島がホランドを知る前から知っていた友人である J・G・スマートは新島のことを「大学で最良のクリスチャン」と呼んでいたらしい。ホランドはスマートから、新島がクリスチャン学生と同室になることを切望していること、新島は清潔さの権化ともいうべき男であること、そして時折英語の助けを必要としていること——などを聞いて、彼と同室になることを決心したのだった。

一八六八年八月の終りごろに、二人はついにルームメイトになった。ホランドは両親に次のような言葉で新島

を紹介する。

「新しい室友のことでとても喜んでいますが。彼は徹底したクリスチャンで、しかも完全な紳士です。彼は顔色の白い連中、なすべき事を知るための手段をより多く持ち合わせている連中よりもうんと多く、人生の恩恵や特典について知っています。一日中、静かなことハツカネズミの如くで、ほくは妨害を受ける心配はまったくありません。毎晩二人で祈りを捧げます。〔聖書を〕一章ずつ読み、彼が希望すればほくにできる範囲で、解説を加えることがあります。

彼の画才はまったく注目に値します。一年以上前にぼくが描いだベツレヘムの島の水彩画を覚えていらっしやるでしょう。それを彼は驚くべき正確さで模写しています。できるだけ彼の役に立ちたいと思います。」(八月二十九日付)

ホランドは非常にまじめな勉強家だったから、騒がしいルームメイトはもつともにがてだった。「静かなことハツカネズミの如く」という表現が目を引く。新島は生来寡黙の人だったであろう(イタリア旅行中に彼が沈黙の人について書いたエッセイが参考になる)が、同時に、英語がアメリカ人同様には自由にしゃべれないこともあったのだろう。ホランドと新島の間には顕著な共通点が見

られる。敬虔なプロテスタントの信仰と、絵を得意としたこととは、今の手紙に反映しているが、これ以外に鉱物の標本収集への情熱をつけ加えることができる。

新島はホランドにむかつて、何故アメリカに来たかという理由を正確に伝えていた。そのことは、ホランドが両親に宛てて書いた次の手紙に反映している。

「ぼくのルームメイトについてお尋ねでしたね。どうやってアームストに来たのか。誰が必要経費を出しているか。彼の経歴を書くとなると、相当の時間が必要です。非常に面白い経歴ですが、夜もふけたこととあり、今のところは短い概略を示すにとどめ、詳細については後日に譲らなくてはなりません。

新島は日本の或る藩主の祐筆の息子として生まれました。その職は世襲制ですから、いうなれば彼は祐筆待機者というところ。ただし彼はそういう期待は一切持たず、完全に独立の人でありたかつたのです。彼は祖国にあつては可能な限りでの最良の教育を受けました。・・・何冊かの中国の書物を読むうちに、彼はまったく新しい一冊に出会いました。第一番目の文章は「はじめに神は天と地とを創造された」でした。「神とは何か?」これこそ孔子の教えとはまったく異なる何物かでありました。これはプラスの

ものに思えたのです。これは彼がしばしば疑問を抱いてきた点について、何らかの解決のカギを与えてくれるかもしれない。なおも読み進むにつれて、ここに真理がある、という確信が内に湧いてきました。しかしながら、このすばらしい書物の中でも、なかなか他のすべてにまさって最良と思える次の一節が目にとまりました。すなわちこの同じ「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の命を得るためである。」ここにこそ希望があったのです。彼は偶像を捨て去って、アメリカに來る決意をしました。ただし当時としては王命にさからって出国することは死に値する罪であったのです。・・・多くの危険を冒して彼はアルフィアス・ハーディーの茶を運ぶ船にのってポストンに着きました。そして、このハーディー氏が、将来日本での宣教活動を見込んでジョゼフに大学教育を受けさせているという次第です。

以上が彼の辿ってきた道筋の概略です。今夜はシアのトンブソン師が新島を訪問しました。新島は日本の着物を着てみせて、わたしたちを喜ばせてくれました。」(十月三日付)

ルームメイトを両親に紹介するにあたり、彼に決定的な影響を与えた二つの聖句をもつてするホランドに注目したい。これは信仰を同じくする親と子の間で、一瞬にして心的状況を伝達することのできる方法だった。いいかえれば、ホランドはこのように友人の神髄を把握していたのだといえる。新島が幕藩体制の下にあった当時の日本青年としては最良の教育を受けた人だという指摘もまた的確である。そこにはひろん、小さなミスも見出される。例えばハーディー所有のワイルド・ロウヴァー号を、紅茶の貿易をする船と取ったことである。あの船は一八六五年にマニラを出てからどこにも寄港せずにポストンに直行したのであって、紅茶の貿易とは無関係だった。新島の脱国を「王命にさからって」としているが、これは幕府の制度を知らなかったホランドには無理からぬまちがいである。日本の着物を着てみせることは新島の数少ない、独得の余興の一つであったと思われる。

ホランドがはじめて新島を意識したのはスネル教授の化学の時間であった。「ニイジマ」という姓はアメリカ人にはとても発音しにくかったし、まだファースト・ネームで呼び合う時代ではなかったので、新島の級友たち(一八六八年の統計では五六名。大学全体で二四一名)は彼のことを「ジャパニー」と呼んでいた。同室となつてか

らは、新島はホルランドのノートを書させてもらう便宜を得たものと思われる。これは新島遺品庫に保管されているノートの研究が進めば、ホルランドのノートからのコピーがどの程度あったかが解明されていくであろう。新島はホルランドに自分の英文を直してもらう機会もあったことと思われるが、さらにはラテン語の指導も受けていたことが明らかである。それは新島がホルランド宛てにヒンズデイルから書いた一八六八年十二月十二日付の手紙や、ホルランドが六九年六月に両親宛てに書いた手紙二通からしてあきらかである。その時に用いたハークネスのラテン語読本は新島旧邸に残っている。従来大島正満博士によって、ホルランドと新島はギリシア語と日本語の交換教授をした、というふうには伝えられてきたのであるが、ホルランド書簡を通して読む限りでは、ホルランドは新島から日本語の仮名を習っているが、新島がホルランドから習ったのはラテン語だったということが真相のようである。一八七〇年一月十六日付の新島からホルランド宛の手紙が示すことは、新島はラテン語をやめて、ギリシア語に切換え、それをアーモスト高校に習いに行っていた。これは新島を神学校に進ませようと考えていたハーディー氏の示唆によるものであった。

新島は一八七〇年秋からアンドーヴァー神学校で学ん

でいた。アンドーヴァーから、ホルランドのいるウエストボロは、汽車で簡単に往来できる距離だった。この年の収穫感謝祭にホルランドは新島を招待した。ところが同時にハーディー夫人からも招待がきたので、新島としてはハーディー夫人の招待をことわるわけにはいかなかった。本当はホルランドの方に行きたかったことを、新島はホルランド宛てに洩らしている。訪問が実現したのは翌七一年の春のことだった。ウエストボロを訪問した新島はホルランドの要請に応じて州立感化院、ホルランドの日曜学校、月例宣教集会で日本の話をしている。聞く人たちにはそれはずい分珍しい異国の話にひびいたであろう。この時のことを両親に報告する手紙の中でホルランドは次のように書いている。「先日ボストンで日本の大使〔森有礼をさす〕が彼に会い、費用は全部引受けるから官途に就くようすすめました。ジョゼフはそういう考え方をする男ではありません。彼は誰の家来にもなる気がないので、日本の状況が許すようになり次第、福音をのべ伝えるに行くために、今は自由でいることの方を選びました。」この手紙もまた見事に新島の考え方の特質を伝えるものである。この間、新島はホルランドが神学校に入ることを考えていたので、アンドーヴァー神学校をすすめている。しかし最終的にホルランドはプリンスストン神学校を選ぶ。

それは神学上の理由というよりも、プリンストンに中東の古代語に詳しい学者がいたためだったことが彼の手紙から読み取れる。

やがて新島は文部理事官田中不二麿の通訳兼案内役として、アメリカ東北部の教育機関の視察をしまわるようになる。彼はアンドーヴァー神学校を休学して、田中とともにヨーロッパに渡る。ホランドとの文通はこうしてとぎれてしまった。一八七三年九月に神学校に復学してからやっと、プリンストンにいるホランドに長い返事を書き、ヨーロッパ旅行の報告をしている。その手紙の結びの方で新島は日本国民を「靈的に不毛な牧場」にさまよう羊にたとえ、できれば彼に宣教師か聖書の翻訳者となって日本に行つてほしいことをほのめかしている。

帰国後の新島は同志社英学校の設立と学生の教育、そして伝道のために全身全霊をあげて働いていた。二人の間に手紙を交換する余裕はなかつたように思われる。一八八四年から八五年にかけて新島はアメリカを訪問したが、その時にも二人が会つた形跡はない。新島はクリーヴランドで開かれたアメリカン・ボードの大会に出席したのだから、ピッツバーグに足をのばすことは可能だった筈である。しかし新島の健康状態はそれさえも許さなかつたのかもしれない。

二人が最後に会つたのは一八八七年十月六日のことだつた。米科学協会と米海軍の依頼を受けて、日食観測隊の一員として来日したホランドは、帰国を前にして京都を訪れた。この日彼は長崎からの帰りに神戸に上陸し、一番の列車で京都に向かつた。十六年ぶりの再会だつた。新島は旧友を沢山の寺院に案内してまわつた。しかし新島が心臓に故障を持つていたことはあきらかだつた。それでも彼はホランドにこう語つたという。「まもなく日本はプロテスタントのキリスト教国になるよ。キリストの御名において、われわれはこの国を主の為に征服するんだ」と。病んでもなお祖国をキリストのために征服するのだという、聖なる野心に燃えている新島の姿はホランドに強い印象を与えずにはおかなかつた。

ピッツバーグを訪れるたびに私は繰返し同じ感慨にふける。もし新島があと二十年、一九一〇年まで元気で同志社を指導していたらどうであつたらうか？ 新島とホランドがアームスト大学で培つた友情を土台として、同志社はピッツバーグ大学およびカーネギー博物館とは特別な友好協力関係を結ぶことができ、同志社の学術の発展は両学長の指導の下に、若干異なる方向に発展していたかもしれない——そのような空想がわくのである。

(敬和学園大学学長)



内村鑑三と新島襄

敬意と批判

笠原芳光

内村鑑三と新島襄には共通するところと相違するところがある。

共通点は二人とも上州の出身であることである。生まれたのはともに江戸の藩邸であり、内村は小石川鳶坂上、新島は一ツ橋門外だが、郷里はそれぞれ高崎と安中である。また、いずれも青年期にプロテスタントイイズムに入信し、初期の専攻は自然科学である。単身、渡米してアーモスト大学に学び、日本に帰国してからは学校教育と伝道に励んだ。そしてともに明治期を代表するキリスト者となった。

相違点は内村が一八六一（文久元）年の生まれであるのに対し、新島は一八四三（天保一四）年の出生で、新

島が十八歳といふかなりの年長である。内村は弁舌、文章ともにすぐれ、とくに文章は躍動感にみち、読む者を鼓舞するものがあり、四十巻にわたる全集がある。それにくらべて新島は書簡などは精神性に富んでいるとはいへ、代表作といえる著作もなく、文の人とは言いがたい。

性格は内村が個性的かつ権威的であつたのに対し、新島は人格において人を惹きつけ、敬意を覚えさせるところがあつた。ともに精神的で内面において繊細であつたけれど、内村は教祖的であり、新島はだれに対しても平等であらうとした。キリスト教理解は内村が宗教の儀礼や制度を批判しつつも教義についてはきわめて正統主義的であつたのに対し、新島は教会制度について自由自治を唱え、教義についても厳格ではなかつた。

内村は無教会を創始し、新島は同志社を創立した。これは非組織的集団と組織的事業との相違である。この「事業」に関して、内村はのちに新島を批判するようになる。非組織には必ずしも協調はいらないが、組織では協調はもとより、現実との妥協も必要となるからである。

*

ところで内村と新島はいつ、どこで出会つたのだろうか。

か。

内村にとつては同郷の先輩であり、おなじプロテスタントのキリスト者としての新島襄の名は早くから耳にしていたに違いない。新島にとつても若くして個人的な俊秀であつた内村について仄聞するところがあつただろう。魚木忠一の「内村鑑三と新島襄」と題する論文^{〔1〕}は兩人の最初の出会いについて、つぎのように記している。

「内村と新島との親しい交友関係は、少くともその二年前（明治十六年）に始まつたようである。それは内村の手紙の一節から証明されるが、明治十六年に東京で開催された、全国基督教大親睦会の写真に、二人が隣りあつて立っていることから察せられる」

この「内村の手紙の一節」とは一八八五（明治一八）年八月一六日にアメリカ合衆国メーン州ウエスト・グールズポローから新島に送つた日本文の手紙の一節を指すと思われる。文中の「一昨年」は一八八三（明治一六）年のことである。

「先生ヨリノ花墨昨日午後拝受シ、実ニ一昨年以來非常ノ御厚情ニ預カリ、今日西半球上ニ迷フニ当テ、又モ只ナラザル御役介ニ相成リ何トモ御礼申上方無之」

また「全国基督教大親睦会の写真」とは一八八三（明治一六）年五月八日から一二日にかけて東京九段で開か

れた第三回全国基督教信徒大親睦会の際に写された記念写真を指している。この写真には当時の日本のプロテスタントを代表する人物、海老名弾正、湯浅治郎、津田仙、松山高吉、奥野昌綱、平岩愷保、横井時雄、宮川経輝、井深梶之助、押川方義、金森通倫、植村正久、小崎弘道らが並んでいるなかで、二列目の中央、向かって右に新島、その左隣に内村が立っている。

ちなみに写されている四〇人の内、洋服姿は僅か五人であり、その内の二人が新島と内村である。なお、この親睦会の会期中の五月九日、浅草の井生村楼における会で、のちの札幌独立基督教会を代表して参加していた内村は「空ノ鳥ト野ノ百合花」と題する講演をして喝采を博した。当時、数え年二三歳の少壮でありながら内村はすでにキリスト教界に注目される存在であった。そして、おそらくこの会が両者の初対面の時であっただろう。以後の数年間、内村は新島の「非常ノ御厚情ニ預カ」ったのである。

内村はこのあと一二月に農商務省農務局水産課に勤務し、翌一八八四（明治一七）年、浅田タケと結婚した。しかし一〇月には事実上の離婚をし、一月に渡米、一八八五（明治一八）年一月、ペンシルヴァニア州エルウインの精神障害児養護院の看護人となった。そのあとの

内村と新島の二度目の出会いについてオーテス・ケリーは「内村の決断の夏——一八八五年」という論文²⁾にこう記している。

「新島襄は健康の為世界一周の旅路にあり、内村がアメリカの東部にやって来る少し前には丁度ヨーロッパを経てアメリカに着いていた。／＼新島がワシントンから帰る途中で彼等二人はおち会ったのである。パルチモアのジョンズ・ホプキンス大学を訪れた新島はそこに学んでいた太田稻造（後の新渡戸稻造）と話し合った。その話の結果を新島は英語でつけていた日記に書き記している。

『内村君は全く憂うつで何をしていたかわからない』。新島はフィラデルフィアまで行った。彼の日記はこう続く。『私は直ちに内村君に電報をうった。朝早く「一八八五年五月八日」朝食前に内村君はホテルに訪ねて来た。私たちは彼の将来の計画について語りながら非常に楽しく会談した。又共に「聖書を」読み祈りもした。彼は告白しキリストの仕事をする決心³⁾について語った』。／＼新島と内村はただ一日だけを共にしたのであったけれども、この時の新島は丁度彼が二年前になしたのと同様に内村に助言する立場にあったことは明らかだと思われる。内村にとつて一人の年上の『キリストに在る兄弟』のみちびき程必要なものはなかった』

この一八八五（明治一八）年の当時、内村が新島にどのような尊敬をはらっていたかは内村の新島に宛てた一通の手紙に明らかである。それらはさき一部引用した一通を除き、すべて英文で記されている。そのうちの最初の手紙の冒頭を『内村鑑三著作集』第一八巻の日本語訳によって引用しよう。

「ペ州エルウキン」／一八八五年六月二日／親愛ナル新島先生ノ兄弟ノ情、訓誡ノ言ヲ載セタル貴翰、言フベカラザル感謝ヲ以テ拝受仕候。ソレハ弟ノ饑エシ靈魂ヲ養フ非常ニ豊カナル食物トシテ、又夕過ギシ生涯ノ最モ暗キ部分ヲシバく、回想シテ傷ツキシ弟ノ靈ニ響ルタメニ、役立チクレ候」

内村はこの時、養護院の看護人を辞めて大学に入学しようと考えていた。『内村鑑三全集』第四〇巻の「解題」によると、「その年に書かれた新島宛書簡は、内村が入学すべき大学をどこに決めるか、という問題をめぐっている。アマスト大学かペンシルヴァニア大学（の医学部）か、の選択の問題である。それは、彼の将来の活動が直接伝道になるか間接伝道になるかの選択を意味する」という。

そして内村は新島の勧めもあってアマスト大学を選ぶ。新島は母校でもあるアマスト大学の総長ジュリア

ス・H・シーリーに手紙を書いて内村を紹介し、内村の入学後もなんとか手紙を送った。その抜萃をオーテス・ケリーの「新島襄、内村鑑三、そしてアマスト大学」という文章から引用する。

「わたしの愛する同国人で兄弟である内村に、それほど深い関心を抱いて頂きまして、心から感謝申し上げます。（一八八五年一〇月二二日、ボストン）」「愛する友人内村によろしくお伝え下さい。あんまりあわてて準備をしないようにと言って頂きたいのです。私たちの分野で今後必要とするのは、完全に準備をととのえた学者的な人物であります。（一八八五年一二月二五日、京都）」「内村君にぜひよろしくお伝え下さい。同君の帰国を辛抱強く待っていると言って下さい。（一八八六年四月二五日、京都）」これらの言葉から新島は内村が帰国した後、教師として同志社に迎え入れたい希望をもっていたと推察される。内村もまた、この時点では新島に対する敬意とともに同志社にもいささかの関心を抱いていたかに見える。それは内村が一八八五（明治一八）年一〇月二八日に在学中のアモスト大学から新島に宛てた手紙の末尾から推測することができる。文中の「総理」がシーリーを、「事業」が同志社を指すことはいうまでもない。「我々ハ皆ナ先生ノ『アムハルスト』ニ御出デ被下ルヲ

御待申居候、去ル木曜日夕綜理ハ我等ノ祈禱会ニテ先生ト日本ニ於ケル先生ノ事業ニツイテ談話アリ、彼ノ演説ハ学生達ニ対シ強キ印象ヲ惹キ起セリ、ソノ集会ヨリ何事カ現ハレンコトヲ希望致シ候ノ今コソハ熱誠ナル祈禱、深キ謙遜、感謝溢ル、讚美、而シテ涙ノ時ニ有之候ノ常ニ『キリスト』ニアリテ先生ノ J O N、K、内村』

*

内村はいみじくも「事業」と書いた。原文では“work”となつてゐる。その「事業」とは同志社である。そして、このことがのちに新島批判の焦点になる。

内村はアーモスト大学を卒業し、さらに一時、ハートフォード神学校に学んだのち、一八八八（明治二一）年五月に帰国した。しかし同志社には来ることなく、九月に新潟に新設された北越学館の仮教頭に就任した。それも三箇月で辞め、再婚し、第一高等中学校の嘱託教員となる。そしていわゆる「不敬事件」がおこる。その後の内村については記すに及ぶまい。ここでは内村の新島観、同志社観についてだけのおきたい。

帰国後の内村は新島に対して批判的になつていった。それは新島に対してであると同時に、より強く新島の「事

業」である同志社に關してであつた。そのことには新島の没後、それもかなりの歳月をへた一九〇七（明治四〇）年一月に『中公公論』に寄稿した「新島先生の性格」という一文に明らかである。一部分を引用しよう。

「新島先生が事業に忠実であつたこと、愛国心が強くして日本を切に思はれたこと、それから基督教に深く帰依して居られたこと等は、何人も異議のないところである、が唯一つ私の疑ふ点は、先生を宗教家と見る事が出来やう乎、其一点である、米国でも逢つたし、日本でも逢つた、先生と私とは相逢つたことは稀だとはせぬが、何時も心靈上の問題となると先生は沈黙を守られた、私の熱信を褒めて呉れたけれど、自身で深く味はれた心靈上の自証の境界を話されたことはない、一度も無い、先生を尊崇する人から先生に就いての談話を聞いても、比処ぞ先生が宗教家だといはるべき点が窺はれない」

「重ねて約言するならば、新島先生は誠実の士である、愛国者であつた、自己の爲したる事業には熱心なる人であつたとは言ひ得るが、宗教家には言い兼ねるといふ事に帰着する」

新島は事業家ではあつても宗教家ではない。内村の考えを端的にいえば、そういうことになる。新島が宗教家でないとはどういう意味か。たしかに新島には理科系の

人間にありがちな合理的な思考や人生態度があった。宗教的ということをや非合理的、逆説的な考えかた、生きかたを意味するとすれば、それらは新島に乏しかつた。しかし新島には、それがシンプルなものであるとはいへ、充分に精神的、人格的なものがあつたはずである。

内村にとつて新島に対する往年の純真な敬意があつた。無くならずたとは言わないが、しだいに批判のほうが強くなつた。それは新島の「事業」である同志社が、内村の眼からみれば墮落していったからである。その同志社を内村が痛烈に批判した文章がある。一八九九（明治三二）年一月の『東京独立雑誌』に書いた「同志社」と題する短文である。その冒頭を引用する。

「俗と神とに併なび事へんとせし同志社の、今日の非運に迫りしは決して怪むに足らず、同志社は多くのユニテリアン（悪しき意味の）を出し、外国商館の番頭と、相場師と、銀行社員と、会社員と、婦女的伝道師と、策略に富める宗教家と、新聞記者とを作れり、一方に於ては米國基督教徒の淨財を仰ぐかと思へば、他の方に於ては故後藤象次郎等の穢財を乞ひ、以て精神的教育を我國子弟の上に施さんと試みたり、基督教の聖書に曰く『樹は其實を以て知らる』と、同志社の真相は之を探り識るに難からず」

これらの批判が同志社に關して當つてどうか、見る人の主観にもよるだろう。内村はとくに主観的な傾向の強い人物であつた。また独立の伝道者として、さきにも述べたように現実の問題との協調や妥協を避けることのできる立場にいた。しかし同志社のような学校は時代と状況のなかで生きていかねばならぬ組織体である。内村はいくつかの学校に勤めたけれど、長続きせず、責任者の位置にもいかなかったことが学校なるものへの認識を欠如させていたといえる。

だが、それより重要なことは、ここで同志社がユニテリアン的な思想を生み、現実世界で働く人物を輩出していることを非難していることである。キリスト教は本来、さまざまな解釈をすることのできる宗教である。正統主義だけがキリスト教ではないことを考えれば、ユニテリアニズムもまた一つのキリスト教といわねばならない。さらにキリスト教主義を理念とするということは、いわゆる宗教家をつくることより、なによりもキリスト教精神を世俗のなかに活かす多彩な人材を生み出すことにあるべきではないか。

この点で内村の文章は同志社への批判よりも、むしろ自らのドグマティズムと偏狭を示す結果になつてしまつている。もとより同志社は正当な批判を受けねばならな

い。この小論が内村をおとしめて新島を擁護しようというような考えをもって書かれているのでないことはもちろんである。

内村鑑三にとって新島襄とは、その若き日の精神的窮境において慰めと励ましを与えてくれた先達であるだけでよかつたのである。この二人にとって、それ以後のことは、またそれ以外のことはおよそ余計なことであつた。

(京都精華大学学長)

(1) 『基督教研究』第二八巻第一号、同志社大学神学部。

(2) 『人文学』第二四号、同志社大学人文学会。

(3) 『内村鑑三全集』第三八巻「月報」、岩波書店。

(4) 『内村鑑三著作集』第一八巻、岩波書店。

キャンパスの年輪

—同志社今出川校地—



(増補改訂) B5判 二二二頁
一、五〇〇円 (送料三二〇円)

社史資料室長
河野仁昭著

百十余年の歴史を経た今出川キャンパスには国の重要文化財に指定された彰栄館・チャペルなどの五棟を始め多くの建物あるいは既に姿を消した建物があります。

これらの由緒ある建物に限らず石段・記念碑・樹木を中心に、普段余り意識されていない様なものも含めて、それぞれに纏わる話題を軽妙なタッチで書かれた文章に、新旧の写真・地図などを掲載した話題の豊富な美しい書物です。

また巻末には新島襄の足跡・田辺新キャンパス誕生の経緯なども収録し、校友・同窓は青春時代を、在学生は多くの先輩が残された業績をしのぶ格好の書としてご購入ください。

●購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。

●代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入

電話(〇七五)―二五一―三〇三七・八

勝海舟と新島襄



竹 中 正 夫

両者の相異点

おそらく数多くの幕府から維新にかけての変革期においてその広い見識と、内実した胆力と、そして、将来を見通す洞察力において勝海舟ほど魅力あるすぐれた資質を備えた人物は少かったと思う。維新の先覚者たちの足跡が再検討されている今日、勝海舟についての評価は一層高まりつつあるといつてよい。

勝海舟は、わが国の海軍の創始者であり、徳川の軍勢を代表して西郷隆盛と話し合つて江戸を戦禍から免れしめた功労者であり、枢密院顧問官として明治の政界に重

きをなした人であった。それに対して新島襄は、キリスト教の牧師であり、教育者であった。一方が剣と禅の人であれば、他方は祈りと十字架の人であった。一見両者は交わることもない平行線上の人とみられる。しかし、丹念にみると両者には共通点があるのみでなく、可成り緊密な交友のあったことを知ることが出来る。

勝海舟は一八二三年の生れであり一八四三年に生れた新島襄より二〇歳上であった。しかし、両者は幕末から維新に至る変革の時代に生をうけた者として、いくつかの共通点をもっていた。その一つは二人ともいち早く蘭学を学び、海外の国々の進展に眼をひらいていたこと、二つ目は、両者とも海洋に心をむけ、海舟は一八六〇年咸臨丸の艦長として米国に赴き、新島は一八六四年快風丸によって函館にゆき、そこからベルリン号、ワイルド・ロウヴァー号によって米国にむかった。彼らは閉ざされた島国の彼方に新しい地平線を体験した人たちであった。第三の類似点は、両者のキリスト教とのかかわりである。新島襄が米国においてキリスト教にふれ、受洗（一八六六年）のみならず、按手礼（一八七四年）まで受け、キリスト教の牧師として帰国し、キリスト教主義に根ざして同志社大学を設立したことはすでに知られている。

近年の研究において勝海舟とキリスト教とのかかわり

は、少なからずの関心をよび、江藤淳氏は、「海舟の精神構造とキリスト教との関係は、今後の重要な研究課題となるにちがいない」とさえいつている（「剣と禅とキリスト教」『勝海舟』昭和五三年（二〇頁））。

この論文は、勝海舟と新島襄との出あいを中心にしたもので、勝海舟とキリスト教との関係は別に筆をとって論じることにしたい。ここでは「勝海舟と讚美歌」「勝海舟の耶蘇教観」「勝海舟が揮毫した三つの聖書のことば」「勝邸内のキリスト教集会」そして「勝海舟における自由論」などの興味深い一連のテーマのあることを指摘しておくにとどめる。

両者の出あい

従来からの研究によると、勝海舟と新島襄は、前後二回出あったことになっている。（森中章光「新島襄と勝海舟」『新島研究』第五号一九五五年七月）第一二号、一九五六年（二月）しかし近年、両者の研究がすすめられ、それぞれの『全集』が刊行されるにつれ、両者は前後四回にわたって会見していることが明らかとなった。いづれも、新島襄が勝海舟を東京赤坂氷川町の勝邸を訪ねて会談をしており、その幹旋役をしているのは、勝海舟と

親しい間柄にあつた学農社の津田仙であつた。津田仙は、いち早く（一八七四年）キリスト教を信奉し、息女梅を海外に留学させた人で、新島襄は彼と親交を結び、津田は彼の長男元親を同志社の学生として新島に託し、新島は同志社で学んだ上野榮三郎、杉田（元良）勇次郎、小崎弘道、などが東上すると津田仙を紹介してその指導を仰いだ。ちなみに、上野榮三郎、杉田勇次郎、小崎弘道の三人はいずれも津田仙の紹介で伴侶を与えられ挙式をしている。徳富猪一郎が明治一九年に東上するまでは、津田仙が同志社関係者の東京における世話人であつた。さて『勝海舟全集』から両人の会合をみるとつぎの四回があげられる。

第一回、明治一二年二月二日、二二日、「津田仙、耶蘇教師新島襄」

第二回、明治一五年九月二日「新島讓、津田仙、福田鳴鷲」

第三回、明治一六年五月一四日、「津田仙、新島讓、福田鳴鷲、橋本綱常、芝行」

第四回、明治二十一年一〇月一二日「新島襄、嚴法の事、其他種々談。」（『勝海舟全集』、勁草書房、20・21、日記）

第一回の会見の内容を知る記録は殆んどない。ここで

注目されていることは、二日続けて同一人物とあつてゐることである。人と人との出あいにおいて最初の出あいはきわめて重要な意味をもつてゐる。新島は何故翌日再度勝家を訪ねてゐるのであるうか。

伝えられるところによると、勝海舟は、自らのところに來る多くの來訪者に門戸を開放し、來るものは拒まずの姿勢をとつて接見してゐたが、最初の出あいにおいて一喝を放ち、相手をゆきさぶり、ときにはほぐして本筋の話しに入るのが常であつた。やはり勝海舟と親しかつた嚴本善治は、初めての來訪者への海舟の対応をつぎのよう記している。

初めて來訪するものは、是非大抵は一度、一喝を蒙むるのが例である。其の喝に硬軟、緩急あつて、相手が次第に自然に調が變るやうであるが、激烈なるときは、禪僧の喝も中々及ぶ所にあらず、猛虎一声とでも言はうか、夫はくくひどい見暮である。或人の如きは逃げて出してブル／＼震へて、再び前に出ることが出来なかつたと云ふことである。最も軟かき時は、丸で調子の変つた、とほけ切つたる挨拶で、總て相手の氣を顛倒させて仕舞ふような応接である。然し、一見肺腑を貫く修練に熟して居られるから、至誠真面目の人物、もしくは朴实敦厚の質の人に対しては、決して左様の

からかひもなく、最初から真面目の応接が始まるやうである。（『海舟余波』明治三二年）

従来から勝海舟と新島襄の出あいを伝える記録として、吉本襄の『氷川清話』の左の一節が引用されている。

故新島襄氏、曾て先生を訪ひ、謀るに、私立大学設立の事を以てす。先生例に依り莞爾として曰く、宗教を弘布するは難し。足下が銳意、事に従ふの苦みは、余固より之を諒とせり。而かも私立大学の設立に至りては、事、更に一層の難を加ふ。余密に足下の成功を危まざるを得ずと。新島氏色恬ばす。忽々辞して去る。

（森本章光、『新島研究』第七号、二七頁）

このときの会見が、右の四回の中のどれに相当するのかわからないが、恐らく第一回のものではないかと思われる。それは、勝海舟が初対面の人にきびしくあたったことから充分考えられる。新島がわざわざ翌日再度勝海舟を訪問しているのは、こうした事情から理解されるように思う。つまり、最初の出あいにおいて、勝海舟の鋭い批判をうけて一応退いたものの、自分が堅持する積年の所信を吐露すべく、再び氷川の勝邸を訪ねたのではなからうか。われわれは、この翌日（二月一二日）の話しあいの内容を詳に知ることは出来ないが、

再度勝家に足を運んだ新島の姿勢の中に彼が愛誦していた「堅忍不拔」「精神一到金石亦徹」の精神がここにも反映しているようにみることが出来る。（『新島全集』第四卷二三五頁）

第二回目の（明治一五年九月一日）の会合について、新島自身は「日記」の中につきのように記している。

津田氏ト共ニ勝安房先生ヲ訪フ。土倉庄三郎之為、予之為ニ振筆ヲ乞ヒタリ。書ハ余程美事ニ出来ス、先生之氣象ヲ見ルニ足レリ。（『新島全集』「日記」第五卷一八四頁、なお新島の日記では九月九日となっている。）

新島がこのとき勝海舟から揮毫してもらった書は、いわゆる「六然訓」で、新島はこれを愛誦し、自邸の応接間にかかっていた。のちに勝海舟の好意によって氷川の邸内に足かけ一〇年にわたって居住し、海舟の愛顧を受けた徳富猪一郎は、この書を新島邸の応接間で見たのが勝海舟との出あいのはじめであるといっている。（徳富猪一郎『交友録』昭和一三年、二六一頁）

自處超然

處人藹然

無事澄然

有事斬然

得意淡然

失意泰然

壬午仲秋応讓新島老兄囑

六然居士 海舟

この書を揮毫したとき海舟は、五九歳、新島は三九歳であり、二人の間には二〇歳の隔りがあつた。しかし、勝舟は新島を老兄とよび、親愛の想いをこめてこの書をおくっている。新島もまた、海舟をすぐれた先達として尊敬し、弟子の礼を尽していた。新島は、自分の生涯の浮沈、曲折、得失のおりおりにあつてこの書を見ては励まされていたものと思われる。

勝海舟はこの六然の書を愛誦していたと見え、日本銀行総裁をつとめた富田鐵之助にも、この「六然訓」をおくっている。一八八九（明治二二）年九月、富田が日銀総裁を辞任したとき「自分の失錯にあらざれば、何の憂う所あらんや、世の浮沈は都て如此もの」と一笑してこのことばおくり、富田を励ましたものである。それらしい、富田もこの書を座右の銘としていたという。（吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁―富田鐵之助伝 昭和四九年三二―四頁』）

ちなみに、このことばは、明の崔欽（後渠）のもので、清初の人関度（字中介）の「聴松堂語鏡」に出ていると

いわれている。（同上書三二―五頁）

第三回の会見は、明治一六年五月一―四日で、このときは、東京で開かれた第三回全国基督信徒大親睦会があり、津田仙とともに訪問している。このときの内容については、新島の記録は見当たらないが、一八八八（明治二一）年十一月一九日の勝海舟宛書簡の追伸で、「尚々、五年前非常二御タ>キ被下候先生之御言葉ハ、却而今日之結果ト相成、候間」とあり、第三回目の会合が明治一六年に行われたことが推測される。ここで「御タ>キ」というのは、可成り厳しい忠告をのべたものと思われる。勝海舟が新島裏に対し、「お前さんは千両の金でさへ、さう扱つた事のないに、十万という金を募るといふは、とても出来ないから、およしなさい」と言った。（『勝海舟全集』11、一五三頁―一五四頁）といったことを伝えている。慧眼の持主である勝海舟にしてみると、新島の誠実さと敬虔さはよくわかつていたにちがいない。彼が按じたことは、この国においてキリスト教に根ざして大学を設立するという大事業を、新島があまりにも急いですすめるうとする点にあつた。これは新島にとつてきわめて大切な忠告であり、彼は、さきの書簡の続きに、「今日先生之御賛成ハ五年十年否数百年之後之美果ト相成申候間」とのべ、長期的な展望をもつてその賛意を生かそうとして

いる。新島襄は「同志社大学設立の旨意」においても人をつくることは百年の大計であるとうたっているが、大学設立を焦らず長期的視点から着々と進めてゆく姿勢は、勝海舟の忠告に負うところが少なくなかったと思う。

第四回の会見は一八八八（明治二一）年一〇月一二日に行われた。訪問を終えて一週間後に新島が認めた海舟宛の書簡の冒頭には、そのときの応接への感謝があらわされている。

冷氣漸々相催候際、先生益御勇健御起居被遊候半ト奉欣賀候、陳者過般は久々ニ而高門ヲ叩キ不知不識長坐ニ及ヒ御馳走頂載、又種々之御経験ヲ拝聞仕心窃ニ覚ル所有之、深ク先生之御訓誨ヲ服膺可仕候、其節モ矢張五年前ニ罷出相願候同事件、即チ私立大学設立之事業ニ付、懇々先生之御賛翊ヲ相願候処、五年前之御言葉トハ大ニ相違シ甚快ク賛翊之義御承諾被成下候条、小生ニ於而何之喜ソ之ニ如クモノカアラン、已ニ去七日之新紙上ニ御一覽有之候通、今回ハ広ク天下之人士ニ訴へ之レカ賛成ヲ仰キ申候間、先生ニハ特殊之勞ヲ取ラレセラレ、広ク朝野之御知人中ニ御募被下候ハ、重々之事ト存シ、同志社設立始末并ニ同志社大学設立旨趣書各数部奉呈仕候間、此機ニ乘し御知人中御奨励被下候様、伏而奉願上候、頓首敬白（明治二一年

一月一九日付勝安芳宛新島書簡『新島襄全集』第三卷、六七九頁）

この書簡からみると、この四回目の会合は、午後五時から九時に及び、その間夕食をはさんで長時間にわたって談話している。さきあげたように、勝海舟はその「日記」に「新島襄、厳法の事、其種々談」と記しているが、新島襄は、明治二一年の「漫遊記」にそのときの話題を可り詳しく書きとどめている。それによると、主として四つの点について話しがなされたことがわかる。（「漫遊記」『新島襄全集』第五卷三七八頁〜三八〇頁）第一の点は、徳川時代の政策の評価にかかわるもので、「徳川氏ハ陽ハ厳ナル禁令アルニ似テ、陰ニハ人民ヲ寛待セリ。是レ三百年ノ昌平ヲ来ラシメシ以謂ナリ」という勝のことばを記している。

話しあいの第二点は、勝海舟の宗教論であつた。さきにも触れたように、海舟は宗教の自由を尊重することを旨とし、キリスト教に対して黙許の見解をあらわしたが、新島襄との話しあいにおいても、この点についてつぎのように語ったことが新島によって記録されている。

先生ハ宗教自由ヲ兼テヨリ主張セラレ、徳川家ヨリ明治政府ニ移リシ当坐、横浜ノ仏人カ天主堂ヲ築キシトキ、政府ヨリ之ヲ糺セシニ、本国人ノ此ノ教ヲ奉ス

ルモノノ為ニ立テタルナリト云ハレシニヨリ、其ノ儘ニ附シオキシニ、何ツトナク日本人迄モ入会シタルニ〔ヨリ〕、之ヲ捕ヘテ入牢セシム。仏人大ニ怒ル。勝先生之ヲ放チ、少々ノ錢ヲ与ヘテ去ラシム。

長崎ノ天主教徒ヲ優待スルニ至リシモ、勝先生ノ取計ナル由

先生ノ曰ク、家康ハ耶蘇教ヲ黙許シ、仙台政宗ノ支倉ヲ欧州ニ派遣セシモ許シタリ。三代將軍ノ時代ニ至リ初メテ嚴禁セリ。然レ〔下〕モ長崎辺ノ信徒ハ累代信仰ヲ伝ヘ来レリ、此レ余マリ嚴ナラサルノ証拠ナリ退去解除ノ特典モ先生ノ其^カ發論ナルヨシ、其ノ意見書ヲ示サレタリ〔『新島襄全集』第五卷、三七九頁〕

ここでいう「意見書」とは、勝海舟が明治四年に出した「耶蘇教黙許意見」で、「解難録」に収められているものである。〔『勝海舟全集』第一卷、三七七頁〜三七八頁〕

さらに、新島襄はその日の会話において、勝海舟が新島襄にキリスト教の伝道についてつぎのような示唆を与えたことを記している。

耶蘇教皇張モ陽ニ敵ヲ作ル勿レ、公認願ハアノマ、ニナシオケト云ハル。玄関ヨリ入ラス勝手口ヨリ入レ〔『新島襄全集』第五卷、三七九頁〕

この忠告は、明治のキリスト教のみでなくわが国のキリスト教においてきわめて重要な意味をもつものであった。

勝海舟と新島襄の第三の話題は「朝ニ真ノ忠臣ナキコト」であり、市区改制と称して、地価を二倍にあげ、予め買っておさえた要地を高価に売り渡して私腹をこやす策などが批判されており、これも現代的意味をもった課題であった。

第四の話題は、新島積年の課題であった同志社大学設立についてであった。五年前には、可成批判的であった勝海舟は、今回においては、格段の理解を示している。会談の翌日（一〇月三日）、新島は徳富猪一郎宛書簡において、つぎのように伝えている。

昨夜勝先生ニ御面会申續々之長談をなし、又大学之事も充分相願候処、大ニ喜ハレ応分之寄附もなすべく又周旋も致すへき旨御承諾被下候、尤寄附金高ハ逐而知らすへしと被申候、〔『新島襄全集』第三卷、六四六頁〕

思えば、最初の出あいからあしかけ一〇年、仲々かみあわない過程もあったが、新島の終始一貫した謙虚さと誠実さは、勝海舟の心をとらえ、あれほどまで批判していた同志社大学設立に対して自ら賛意を表して寄附に応

ずるのみでなく、他の有力者への周旋の労をとることを約束するに至った。ここに至るに及んだ新島の喜びのおもいは察するにあまりあるものがある。

一 青年への配慮

勝海舟と新島襄の関りにおいて、もう一つ指摘しておきたいことは、本城安太郎という一青年をめぐる二人の配慮である。前記の新島の「日記」(明治二十一年一〇月一二日)によると、つぎのように記されている。

本城安太郎ノ事ヲ談セラルニ、氏ハ面会ヲ求メテ先生ノ玄関ニ一日止マレリ、尚拒テ面会セス、而シテ(テ)他行ヲ為サントシ、人力車ニ乗リテ門ヨリ出懸ケントスルニ、跡ヨリオイ来リ車ヲ扣ヘテ放タス、折入テ面会ヲ求ムト申サレタルニヨリ、止ムヲ得ズ面会シタルニ、彼ハ飛ヒ揚リナリ、尻ノ軽キ書生ナルモドコカ見ドコ(ロ)がアルカラ添書ヲ付テ差上ケタリト云ハル。先生重ネヲ曰ク、此ノ人ハトテモ新島氏ニアツゲネハ他ニ濟度スルモノハナカルベシト思ヒ、御前様ノ方ニヤリタリ云々。老先生ニハ予ヲサシテ先生ト称セラレタルハ甚汗顔ノ至リ(『新島襄全集』第五卷、三八〇頁)この本城安太郎は、東京浅草区の鷺尾家で働いていた

青年で、勝家の玄関に坐り込んで面会を乞い、人力車で出かけようとすればそれをとらえて放さずどうしても会ってくれというので、海舟があつてみると、真摯な青年であるので、新島につきのような懇切な紹介状を送り指導を依頼した。

当年の残暑強ク候へ共、相替フス御勇猛ニ、御教導コレ有ルヘシト、唯々賀シ奉リ候、伵テ、予テ相願候本城安太郎氏、壮年ニ候へ共、確乎ノ存意ヨリ有リ候者、貴君へ隨身、修行イタシ度キ志願ノ旨ニテ、從テ小拙紹介ノ義相依頼候。ソノ志至極宣教ヤニ考候間、成ルベクハ御聞取り、志貫キ候様、御教示御頼申上候。小拙当節言イ難キ場合ニ臨ミ、甚ダ閉口イタシ居願末、当人身上ハ、同人ヨリ御聞ノ様、希イ候。

八月十九日

勝 安芳

新島大導師 机下

本城安太郎は、勝海舟の紹介状を携えて、新島襄を訪ねた。当時(明治二年八月)、新島は、大学設立募金のため東奔西走し、疲れて身を伊香保で静養していた。本城は、八月二十八日に伊香保に赴き面会を求めたが、一回はことわられたが、九月一日に再度伊香保をたずねて新島に面会している。新島は、本城にあり、そののべるところをよくきき、同日、東京の小崎弘道に書簡をおくり、

可成り詳細に本城を紹介するとともに、彼の意図が成就するように尽力を依頼している。(小崎弘道宛新島書簡、明治二十一年九月一日付『新島襄全集』第三卷、六二八頁) その書簡によると、本城安太郎の意図は、高島炭坑の伝道することにあるので、自分は、高島炭坑の所有者である岩崎氏にあつたときに彼のことを依頼するが、小崎の方で一カ年位試験時に伝道会社と何らかの關係をもたせて炭坑伝道にあたらせてみてはどうか面会の上、本人を受け容れてやって欲しいという願いを表明している。

この後、本城安太郎が高島炭坑伝道に至つたかどうか詳かではないが、勝海舟と新島襄が切なる求めをもつこの青年のために配慮をなしていることは、両者の性格に通ずるものを覚えることが出来る。さらに、この間、勝海舟は、新島襄を「新島大導師」ともよび、かつ、「先生」とよんで尊敬の意を表し、新島はそれに対して「甚汗顔ノ至リ」と恐縮しているあたりに、両者の間柄の深まりを覚えさせられるものがある。

新島の永眠にあたって

周知のように、新島襄は、一八九〇(明治二三)年一

月二三日に大磯で永眠した。彼の死を悼んだ多くの人びとのなかに勝海舟がいた。彼は訃報に接して弔意を表すると共に、新島の愛弟子である徳富猪一郎、金森通倫、小崎弘道の三人にあててつぎのような一書をしたため新島なきあとの同志社人の覚悟についてのべている。

新島師遠行の旨、御知らせ遣わされ驚き入候。兼て師の思慮度に過ぎ、事業盛大を期するに急なる、及ぼすながら、御忠告申述候処、此の訃音に接し、遺憾に堪えず候。

今日行掛の大業、跡々を跡締の候は、言うに及ばず六ヶ敷ものに候間、諸君、御深慮これあり、百難重り到り候事と、御覚悟專一と存候。小拙是迄、艱危の衝に当り、唯々、一誠字不撓の心得にて、内外我が負担するもの、悉く矛盾と心得居り、漸く廿余年を経過し、猶一日の如き思いを成し申候次第。後善の策も、甚六ヶ敷く、案外の事も生じ候もの。右亡師の為、且つ諸君へ老朽の一言、腹臆無く申述候。御聞流し下さるべく候

以上

勝安芳

徳富猪一郎

金森通倫

様各位

小崎弘道

〔徳富猪一郎「交友録」昭和一三年、二七五頁〕

この書簡のなかに、創立者の新島襄を失って悲しみの中にある門人たちに百難が重なり来ても、誠実をもつて不撓不屈のおもいをもつて処する姿勢を自らの経験から説いていることは興味深いことである。

新島の遺骸は、大磯から京都に運ばれ、一八九〇（明治二三）年一月二十七日に葬儀が行われた。その日は雨の日であった。延々とつづく葬列が同志社から若王子に続いた。列の人びとは、新島襄の精神をあらわしたことを大書したいくつかの弔旛ちようはんをかかげて行進した。その中で一きわ多くの人びとの注目をあつめたのは、丈余の白縮緬に大書されたつぎの二つの文字であった。

〔自由教育自治教会両者並行邦家万歳〕

「彼等は世より取らんと欲す吾等は世に与えんとす」
これらの二つの弔旛は一つは民友社、もう一つは、大江義塾の依頼によって、勝海舟が揮毫したものであった。ここにも、新島の精神を愛した勝海舟のおもいにわたしたちは触れるのである。

さきにものべたように徳富猪一郎は、当時勝海舟の邸内の家に住み、親しい間柄にあった。徳富の依頼によつて、海舟はこれらの弔旛を揮毫したのみでなく、若王子山頂にある新島襄の墓の揮毫をもなした。同志社人の多

くは、この墓碑が勝海舟の揮毫によることを知っている。しかし、その背後には、勝海舟と新島襄を結ぶ深交友関係のあったことを知る人は少ない。碑背に刻まれた文字は勝海舟が友人として、新島襄を惜しんでやまない心情をあらわしてあまりあるものである。

〔明治廿三年一月廿三日〕

友人勝安芳悼新島氏之長眠

追想之餘書之

（大学神学部教授）